

抽象 abstractio 理論についての管見

——秋葉先生のご報告に接して——

山田 秀

目次

はじめに

抽象 abstractio から知性 intellectus へ

Intellectus と corpus と anima (1)

Intellectus と corpus と anima (2)

有限的存在にとつての intellectus のより深い意味

終わりに

はじめに

秋葉先生の懇話会での講演「人格主義の生命倫理学とヒト胚の尊厳について」の内容は、すでに南山大学社会倫理研究所のホームページを通じて公開されています^①、このたび新たに論稿を纏めていただきましたので、私がそれをここで要約する必要などないと思います。

懇話会当日、質疑応答時にもしも質問が途切れたときにはちょっと発言してみようかな、と考えていた問題が抽象理論でした。じつ

は、秋葉先生のご報告を聞きながら、そうだろう、と私は膝を打っていた。何故かといいますと、私の大学院時代、これで随分苦労してやっと自分なりに理解できたと思つた内容に一致していたからです。トマス・アクィナスの神学および哲学を学ぶさいに、ここで大分もたつた記憶があります。抽象理論は、トマスの人間存在論、認識論において重要な意味を有すると予想していましたから、当時は稲垣良典先生（当時九州大学教授）や山内清海神父（当時サン・スルピス大神学院院長）の著書、それにジャック・マリタンやエチエンヌ・ジルソンといった高名なトマス学者のものなどをかじりながら、少しずつ馴染んでいったのです。そうした背景があつたものですから、秋葉先生が質問に対してきつぱりと抽象理論で答えられたとき、思わず膝を打つたのでした^②。

抽象 abstractio から知性 intellectus へ

抽象理論というときの「抽象」は、様々なものに偶然的に共通す

る性質(たとえばリンゴの赤色、火の赤色、血の赤色、バラの赤色、国旗の赤色など)を取り出すということに限定されません。むしろ、より存在の本質・実質にそくした「そのもの性」quidditasといひましようか、「個物に内在する本質」essentia in reとも呼ばれるべき事態を、つまり存在者の存在構造に即応した事態を人間知性intellectusが可能態から現実態へと(つまり、phantasmaからspecies intelligibilisへ)その存在様態を高めるといふ働きを主要には指す、と理解しております。あるいは、能動知性の可感的表象への転回(conversio intellectus agentis ad phantasma)と表現されることです⁽⁴⁾。そのことを強調するために稲垣先生はむしろ「分離separatio」という(語弊を招きかねない)語を使ったほうがいいくらいだ、と考えておられます⁽⁵⁾。この場面では、intellectusは「能動知性」intellectus agensとして大活躍することになります。この能力自体は、考えれば考えるほど不思議なものです。事物に内在していてそれ自体としては感覚では捉えられない筈のものを、感覚の助けを受けながらも、個物(個体といっても個人といってもいいindividuumのこと)に「内在しつつ超越する」そのもの性、本質として把握してしまうのですから。それはまことに創造的な働きではないでしょうか。これをトマス・アクィナスは彼の能動知性論で説明するのですが、その中心に抽象理論がある。そこを秋葉先生は、質疑応答のさいに、質問が終った瞬間に間髪を入れずに指摘された。見事でした。感心しました。思想的同士をお迎えできた、と感じた瞬間でした。

Intellectus と corpus と anima (1)

トマスのintellectus論は、じつはその他にも広がりを見せております。あまり詳しくは存じませんが、先に述べた、抽象理論との連関では、概念形成、判断命題の形成、推論の遂行、こうした場面で活躍します⁽⁶⁾。更に、たとえば、神Deusは虚無からこの世を作った(creatio mundi ex nihilo)、とされます。その創造の業ないし働きにおいて、人間のばあいだけは、他の存在者の存在の生成消滅とは異なるものとしてトマスは説明しているようです。人間のばあいは、他の一切の存在者についてみられるように質料と形相の単なる合体から形成されるということだけで存在が完成するということではなく、intellectusをちよくせつ創造することが出発点におかれます。このintellectusを「知性」と翻訳してしまうと非常に具合が悪くなると思います。もつと根源的な「存在の根っこ」のようなものだろうと思えます。一人一人の人間について、神はこの「存在の根っこ」を与えて下さる。しかし、この「存在の根っこ」はそれだけでは不完全であり、不安定であります。そこで、「身体」corpusを自らに帰属させてそれに生命を「伝達」communicareする。その身体に伝達された身体と俱なる生命が「魂」animaと呼ばれる⁽⁷⁾。人間的な認識が誕生するうえで身体が欠かしえないものとなります。Omnis cognitio incipit a sensibus. すべての認識は感覚に始まる。すなわち、人間的な認識には身体的能力器官の援け、感覚を必要とするわけです。これは英国経験論の専売特許ではない。ですから、こうし

た背景事情を弁えさえすれば、anima は「魂」とよんでも「生命」といつてもいいのではないかと私は思います。(もちろん何れの語がより適切なものか、との問題は別途あるわけです。)

Intellectus と corpus と anima (二)

そうしますと、人間はいつから人間なのか、という問いが問われる場面がここに自然と浮かび上がってくるように思われます。それは「存在の根っこ」であるところの intellectus が贈与される、人間一人一人の「存在の始原 principium, arche」として神様から直接授かるその瞬間ということになるでしょう。もちろん、それはいつであるのか私には断言など到底できません。秋葉先生は、人間の生命が始まるのは生物学的に「人間」の生命(ヒトの生命)が認識されるときである、と考えておられます。それはそれでおそらく間違いない、と私も思います。これに対して、ある方が、人間であるか否かの判定が「科学的に」科学によって下されるということになつたならば、それはとても危険な要因を背負い込むことにはならないだろうか、ときつと老婆心(老爺心)からおっしゃった。そして、たとえば、絶滅種である homo habilis がかりに現存していて、homo sapiens と交配が可能であったならば、どうなるのか、というように質問されました。以前はネアンデルタール人は現生人類の homo sapiens には分類されず、homo neanderthalensis と呼ばれていましたが、現在ではサピエンスの仲間と認定され homo sapiens nean-

derthalensis と学名が変更されています。それに連動して、ホモ・サピエンスの方も従来の homo sapiens から homo sapiens sapiens と学名変更がなされています。つまり現在では homo sapiens には sapiens 属と neanderthalensis 属とが認定されている、⁽⁸⁾ということになります。同じように、かりに homo habilis との間で新しい「種」が誕生したならば、そこに intellectus が認められる限り、それは人間として理解することができないのではないのでしょうか。これに対しても秋葉先生は、「抽象」という概念でお答えになったように記憶しております。関連する質問においてもそうでした、生物学的にヒトであるというのと人間の尊厳のその尊厳性をいうことはレベルが違いはしないかどうか、との質問にも「抽象」と「靈魂」で答えておられたのではないのでしょうか。「形而上学的な次元のもの」というような言葉をその場面では口にされたように思います。それは、私が先に述べてまいりました intellectus と完全に符合すると考えます。

岩崎武雄先生がある箇所、かりにサルか何かから人為的に人間が生み出されたならば、そのときその本人は、作り手と同じ人間であつて、決して手段とされてはならない、ということをずいぶん以前に書いておられました、このことは存在と価値の二元論の背景で語られておられます。⁽⁹⁾カール・ポパーでしたら、源泉と結果の価値とを区別せよ、というところではないのでしょうか。⁽¹⁰⁾岩崎先生は起源と価値という言い方をされていたように思います。系譜は違いますが、興味深いものとして秋葉報告に接して想起起こしました。

有限的存在にとつての intellectus のより深い意味

パーソン論については、秋葉先生が新たに準備してくださった論稿で説明が恐らく敷衍されていると予想されますので、これについての私の見解をのべることはよそうと思います。ただ一つだけ敢えてここで申しておきますと、人間 homo が「存在の根っこ」intellectus を賦与されて、身体と魂 (corpus et anima)、すなわち、質料と形相 (materia et forma) を有している限り、それは紛いもないペルソナ・パーソン persona だ、と私は理解しています。ですから、たまたまある機能が何らかの不都合によって作動しないというばあいであっても、それ故にただちにパーソンでなくなる、というような解釈は恣意的である、と私は考えています¹⁾。こうした考え方は、ここでは詳論できませんが、基本的には人間存在論に立脚することになります。(もつとも、このように考えることで先端問題が簡単に解決するなどは考えてはおりません。)

なお、intellectus を媒介にして、人間存在論を説くことの利点を次に附記しておきたいと思えます。アリストテレス風に forma と materia の二者で人間の存在を考えますと、人が死んだらもうそれでお終いになってしまいます。想起 (anamnesis) 説を唱えるソクラテスあるいはソクラテスをして想起説を唱えさせたプラトンでしたら、アリストテレスとはまた別の可能性が開かれます。この場合は、身体の桎梏を脱したところで魂はその本来の存在様態を回復するわけです。これら両ギリシャ哲学者に対しまして、しかし、トマス風

に intellectus がそもそも「存在の根っこ」として直接賦与されるということになり、人間的な認識や情動作用やその他さまざまな行為をなすにあたつて、つまりもつとも人間らしく生きる・活動するためには「霊肉一体としての存在」を要求します。これは私たちの日常の経験に合致するように私には思われます。他方、いずれはこの世を旅立たねばならない日を迎える人間としては今ある己が霊肉は亡ぶとも (これはすべての人が認めなければならぬ厳然たる事実であると思います)、人間の十全な存在様態ではないかも知れないけれども、intellectus については、これは消滅を免れているのではないかと、という理論的な可能性が留保されている訳です。ここに永世への希望を託す手掛かりが、キリスト教的にいうと「復活」resurrectioへの理論的手掛かりが与えられているように思います。

終わりに

以上きわめて雑駁なコメントとも感想ともつかない見解を、私が理解しえている範囲でトマス・アクイナスの抽象 abstractio と知性 intellectus を手掛かりとして申し述べてきましたが、それによりいくぶんなりとも秋葉先生のご発言の趣旨がより明瞭になり、あるいはより補強されるということがありますならば、これにすぐる喜びはありません。

附記…ここでは秋葉先生の講演調に合わせて「ですます調」で通

しました。引用文献も手掛かりとなる当該箇所につきましては、本稿では詳細な検討は別の機会に譲ることにいたしました。最小限の注を記したに過ぎません。ご容赦ください。その代わり、末尾に、注で引用したものの他にも、頼りになる参考文献をいくつか挙げておきます。

それから、通常「知性」と訳してすまされている“intellectus”を馴染みやすいようにとの思いから、私はここでは仮に「存在の根っこ」と勝手に訳してみました。これはもちろん定訳ではありませんので、念のために書き添えておきます。トマスの抽象論に関連しては、ドミニコ会のアルトゥル・ウッツの「全体抽象論」, die Lehre der totalen Abstraktion⁴ があります。いずれ論じてみたいと思います。

註

- (1) 二〇〇四年十月一日から、社会倫理研究所のホームページにて一般公開されている。
- (2) 後出参考文献欄を参照。尚、後日知ったことであるが、山内神父は私の叔父の同級生であった。
- (3) 本稿第一草稿を書き上げた二〇〇四年五月連休明けに、秋葉先生の数篇の論文を読む機会を得て、私は驚いた。私と同じ方向で、同じ内容で議論を展開しておられるのを見出したからである。勿論違いはある。徹底性も然るものながら、緻密さもそうである。これを座標に譬えていえば、私の使用する座標は、単位も桁目も粗い。それに対して、秋葉先生のものは、単位が細かく桁目も緻密で、従って、その分当然のことであるが、議論及び論証が正確精緻である。その数篇すべてを紹介する代わりに、最近のものを一篇だけここでは紹介しておいた。その秋葉

論文、即ち、「ヒト胚の尊厳—人格主義の生命倫理学の立場から—」は、完成度の高さからいって「第一級」であり、その内容についても一箇所訂正をも要しない、全面的に首肯できるものである。私が長年月をかけて、少しずつ進めてきていた考察が、そして温めていた考えが、秋葉先生によってより明快で充実した姿を以て展開されているのを知って、一方では深い共感を覚えると同時に、他方では勇気づけられることであった。これは同時に私の情報網なり視野の狭さをも明示していることになる。

- (4) Thomas Aquinas, *Summa theologiae*, I, Qu. 85, art. 1. 『神学大全』邦訳第六冊「二七八頁以下」。Vgl. auch Peter Paul Müller-Schmid, *Der rationale Weg zur politischen Ethik*, S. 17ff.
- (5) 稲垣良典『トマス・アクィナス』八三頁以下。
- (6) Thomas Aquinas, *Summa theologiae*, I, Qu. 79, art. 2 et art. 3. 『神学大全』邦訳第六冊「一四五頁以下、及び、一五〇頁以下」。
- (7) Thomas Aquinas, *Summa theologiae*, I, Qu. 76, art. 1. 『神学大全』邦訳第六冊「四二頁」。但しこの箇所では“intellectus”という語ではなく、“anima intellectiva”という用語で語られている。
- (8) 江原昭善『人類の起源と進化』第九章、特に一二二頁。
- (9) 岩崎武雄『正しく考えるために』八四頁以下、岩崎武雄『哲学のすすめ』一八六頁などを参照。
- (10) See Karl Raimund Popper, *Conjectures and refutations*, Introduction: On the Sources of Knowledge and of Ignorance, esp. p. 24.
- (11) 秋葉悦子「ヒト胚の尊厳—人格主義の生命倫理学の立場から—」一〇一—一〇二頁、一一三—一四頁も同旨。秋葉「ヒト胚の尊厳」一〇一—一〇二頁では、「生命の質」論と「パーソン論」について簡潔な説明と反論が与えられている。その積極的な説明は、同論文の特に一一二頁以下に展開されている。ウィーン大学のペルトナー教授は、ほぼ重なる問題領域に関して、“Potentialitätsargumente”、“潜在可能性”論と“Personen- oder Interessenargumente”、“パーソン論”[これは Anton Leist の区分名による]”そして、後者については“Interessethik”

参考文献

- とも呼んでいるのだが、これらに対する周知な批判を展開している。趣旨は、秋葉論文とはほぼ全面的に一致している。Vgl. Günther Pölnner, Achtung der Würde und Schutz von Interessen, in: J. Bonelli(Hrsg.), *Der Mensch als Mitte und Maßstab der Medizin*, S. 13ff.
- Vgl. Otfried Höffe, Menschenwürde als ethisches Prinzip, in: O. Höffe, L. Homfeldter, J. Isensee, P. Kirchhof (Hrsg.), *Gentechnik und Menschenwürde: an den Grenzen von Ethik und Recht*, Köln 2002. 例えは、"speciesism" (唯種独尊主義、或いは意を汲いず訳せば「当該種帰属者限定尊重主義」) 批判を展開する Peter Singer, *Animal Liberation*, London 1995, chap. 1 に対する [この部分では] Helga Kuhse, Norbert Hoerster に対する「十分通用する」適切な反批判を O. Höffe, Menschenwürde als ethisches Prinzip, S. 119-120 にも見ることが出来る。
- 秋葉悦子「ヒト胚の尊厳—人格主義の生命倫理学の立場から—」『続・独仏生命倫理研究資料集(上)—独仏を中心としたヨーロッパ生命倫理の全体像の解明とその批判的考察—』(千葉大学、二〇〇四年)
- トマス・アクイナス『神学大全』創文社
- 稲垣良典『トマス・アクイナス哲学の研究』創文社、一九七〇年
- 稲垣良典『トマス・アクイナス(人と思想)』勁草書房、一九七九年
- 岩崎武雄『哲学のすすめ』(現代新書)講談社、一九六六年
- 岩崎武雄『正しく考えるために』(現代新書)講談社、一九七二年
- 江原昭善『人類の起源と進化—人間理解のために—』裳華房、一九九三年
- 山内清海『哲学』サン・スルピス大神学院、一九七八年
- Sancti Thomae de Aquino *Summa theologiae*, edizioni Paoline, Milano 1988.
- Johannes Bonelli, Der Patient als Person, in: J. Bonelli(Hrsg.), *Der Mensch als Mitte und Maßstab der Medizin*, Wien 1992.

- Etiennne Gilson, *Le thomisme, Introduction à la philosophie de saint Thomas d'Aquin*, J. Vrin Paris 1972.
- Otfried Höffe, Menschenwürde als ethisches Prinzip, in: O. Höffe, L. Homfeldter, J. Isensee, P. Kirchhof (Hrsg.), *Gentechnik und Menschenwürde: an den Grenzen von Ethik und Recht*, Köln 2002.
- Jacques Maritain, *Éléments de philosophie, t. I. Introduction à la métaphysique* (Téqui, Paris 1920), *Œuvres complètes Vol II*, Paris 1987.
- Johannes Messner, *Kulturrethik mit Grundlegung durch Prinzipienethik und Persönlichkeitsethik*, Innsbruck-Wien-München 1954.
- Karl Raimund Popper, *Conjectures and refutations*, 2. ed. New York-London 1965.
- Jorge Rivera, *Konkretes Erkennen und vorstellendes Denken: eine phänomenologische Deutung der Erkenntnislehre des Thomas von Aquin*, Freiburg / München 1967.
- Peter Paul Müller-Schmid, *Der rationale Weg zur politischen Ethik*, Stuttgart 1972.
- Günther Pölnner, Achtung der Würde und Schutz von Interessen, in: J. Bonelli(Hrsg.), *Der Mensch als Mitte und Maßstab der Medizin*, Wien 1992.
- Arthur-Fridolin Utz, *Sozialethik, 1. Teil, Die Prinzipien der Gesellschaftslehre*, Heidelberg 1958.
- Arthur-Fridolin Utz, *Sozialethik, 2. Teil, Rechtsphilosophie*, Heidelberg 1963.